



洋書輸入協会会報

Vol. 31 No. 1 (通巻356号) 1997年1月

謹んで新春の

お慶びを申し上げます

1997年1月1日



理事長 鈴木 信夫

本年はリマでのクライシスが解決しないまま始まりましたが、先ずはこの事件が人質になっている方々全員無事に、しかもテロに対する毅然たる姿勢が維持されて、早期に解決することを皆様と共に祈念しておきたいと考えます。

さて、我が国の経済の動きにつきましては、ここで今更の如く語る必要はないと考えます。ただ、その中でこのJBIAのメンバーの洋書ビジネスへの影響につきましては、厳しい状況にあるということだけは指摘しておかねばならないでしょう。マクロの条件としての円相場の動き、ミクロの条件としての業界内競争の状況、い

れも従前の外国書籍雑誌の流通に係わる基礎条件を構造的に変えて対応することを求められている、そういう質的なレベルでの変化が来ていると言えます。

こうした状況下で、昨年弊社の役員人事の関係もあって、理事長のポストに就くことになりました。白らの能力とキャリアを考えても、正直理事長としてこれからのJBIAをどうしていったらいいかについて、頭を悩ましているところです。理由は沢山あります。例えば昔ですと、海賊版対策などを含む著作権の保護対策、外貨の割当て、通関業務への要請など海外書籍雑誌に係わる業界としての全体的な利益に貢献する共同行動であって、し

目次

新年の挨拶……理事長 鈴木信夫……1	お知らせ ……………3	病原性大腸菌 O-157: 雑感 ……………7
理事会報告 ……………2	文化厚生委員会だより ……………4	広 告 ……………8
海外ニュース ……………3	寝正月 テレビで歌とのおつきあい……5	

かも自由で公正な競争を制限することのない運動のようなことが、協会事業として会員の皆様に期待されたと考えられます。しかしながら、この種の事業の環境については既に整って来ていますので、協会会員は互いに競争し合う同士、あるいは業種が違うのも同士といった、互いに馴染みにくい関係だけを残す状況に入っています。結果として、従来から継続している親睦会的な活動だけが残る、この厳しい時代に親睦だけで一定の団体としての存在意義を認め合うことが可能だろうか、という疑問につながります。こうした問題は会員の多くの方がお持ちになっていらっしゃるから、昨年10月に特別委員会を設け、これからのJBIAの性格と活動についてどのように意義あらしめるかを検討することになり、今年の総会までにその結果を得ることになっています。従いまして、理事長といたしましてもその纏めを持って、これからの方向を考えることにしています。

率直に云って、現在私達は所謂洋書・外国雑誌の取扱業者としての企業体を経営して参りましたが、すでに洋書も和書も外国雑誌も和雑誌も、高度の学術系のものを除けば一般消費者にとって何も特別に分けて講読するものではなくなっています。カラオケでうたわれる歌が外国語（特に英語）混じり、あるいはそのものといった内

容に変化してきているように、言葉の障壁と書籍雑誌の商品区分とが一緒という時代は過ぎました。

円相場は今年のところで弱含みですが、それでも外国書籍雑誌の価格を過去に比べ極めて大きく引き下げる程強くなりました。つまり、誰でもが買っている国内書籍雑誌と同等もしくはそれより安く買える商品になりました。学術系の外国書籍雑誌につきましても、STMの分野では特に、電子化された媒体やオンラインにより液晶画面に取り出し、ダウンロードし、個人のデータとしてファイルする読者が急速な勢いで増加しています。

こうした変化の中で、単に洋書や外国雑誌という取扱商品のくくりで、企業体としての会員を互いに結びつける要素は一体何なのでしょう。この設問に答えるには経済的な意義や制度的な意義に通じる、例えば業界全体の市場拡大に寄与する普及といった効果を、自由で公正な競争という要件を満たしながら実現する方法を考え出すしかありません。特別委員会への期待はここに集まるのではないかと考えます。

新年からこのようなことを書く無粋をどうぞお許しください。年の始めだからこそ、と思い会員各位のご教示への期待を込めて書かせていただきました。末尾ですが会員各位のご健勝とご多幸を心から祈り上げます。

理事会報告

12月26日（木）

（一）収支報告

12月20日（金）開催の総務委員会で審議の11月分収支について総務委員長より報告があり承認した。

（二）委員会報告

総務委員会

既報の来年度定時総会の開催日を1997年5月16日（金）に決定した。

広報・渉外委員会

イ. 公正取引委員会より講師を招き丸善第二ビルで開催した勉強会は予定の40名を越える参加があり成功裏に終了した。

ロ. PWへの第2回目の抗議文に対する12月17日付返信は単に返事の遅れを詫びたのみで、東京国際ブックフェアの開催時に協会の理事と話し合いたいということであった。

理事会としては先ずPWが陳謝することが先決で会う会わないは次のことと抗議することにした。

ハ. 12月18日（水）第3回の特別委員会が開催された。

三回の開催により意見はほぼ出尽くされたので、次回より重点的に見直す箇所の特定を行い最終的には理事会へ具申する。

（三）退会社

下記の4社をそれぞれの理由により12月末日付で退会とした。

（有）福本書院（洋書業務縮小）

（株）名著普及会（会社解散）

オリエンタルブックサービス（株）（会社解散）

ヴィ・シー・エイチ（吸収合併による事業所撤退）

海外ニュース

英国の学生も書籍離れ？

POLICY STUDIES INSTITUTE が、このたび英国の学生の経済状態について行った広範囲な調査の結果、研究科目の学習に必要な諸費用の内書籍に費やす割合は全体の四分の一であることが判った。この調査によると、1995年から1996年の一年間で、学習関連の総支出504ポンドのうち平均129ポンドが書籍に、150ポンドがコンピュータに、そして137ポンドがその他の必要品に占められている。

芸術学部および医学部の学生が最も多く書籍を利用しており、高額な書籍もまたこれらの分野の学生によることが調査の結果として出ている。

女子学生のほうが男子学生よりも、そして年齢の高い学生のほうが若い学生よりも多くの書籍を購入している。数学およびコンピュータを勉強している学生の書籍購入

が最も低いが、彼らはコンピュータ利用の面で最も高い割合を占めている。総体で見た場合は男子の購入額のほうが女子よりも多いが、これにもまたコンピュータへの支出が影響している。

26歳以下の学生の平均収入は、1988年から1989年の一年間では3,031ポンド（1995年から1996年の物価に換算すると4,143ポンド）で、それに対して1995年から1996年の一年間では4,559ポンドとなっている。しかしながら、この上昇は学生ローンを含んだ多額な借入金によるものでもある。

今回の調査 (STUDENT FINANCES : INCOME, EXPENDITURE AND TAKE-UP OF STUDENT LOANS) は、Clare Callender と Elaine Kempson が、英国の73の研究室などで1,971人の学生にインタビューして纏めたものである。このレポートは£16.95でPSI (TEL : 01202-715-555) から発売されている。

—THE BOOKSELLER/JAN. 3, 1977より—

お知らせ

各社の新代表取締役社長に下記の方々が就任されました。

- ◎株式会社 マイブックサービス 村上正樹 (1996年6月)
- ◎日販アイ・ピー・エス株式会社 鶴田尚正 (1996年6月)
- ◎株式会社 三省堂書店 亀井忠雄 (1996年9月)
- ◎株式会社 旭屋書店 早嶋 茂 (1996年10月)
- ◎株式会社 東光堂書店 真野生道 (1996年10月)
- ◎株式会社 南江堂 本郷允彦 (1996年12月)
- ◎チャーチル・リビングストーン フィル・ミッチェル (1997年1月)
- ◎ロングマン・ジャパン(株) ドッギー・カメロン (1997年1月)
- ◎MRI 情報ネットワーク(株) 石本祐司 (1997年1月)

注：就任年月順 (DIRECTORY 1997編集資料より)

総代理店のご案内

ユニテッド・パブリッシャーズ・サービス社

Tel. (03)3291-4541

Fax. (03)3293-3484

代理店業務開始のお知らせ

Blackwell Publishers (U.K.)

(Business & Finance Titles)

総代理店

Cassell Academic (U.K.)

指定代理店

The AEI Press (U.S.A.)

総代理店

RAND (U.S.A.)

総代理店

Museum Tusculanum Press (Denmark)

総代理店

ストッキスト業務開始のお知らせ

Macmillan Press Ltd. (U.K.)

第 82 回 72 会ゴルフコンペ

高根カントリークラブ 1996 年 12 月 12 日 (木)

初冬とはいえ、無風、快晴の暖かい絶好のゴルフ日和、コースは幹事の一人で東亜ブックスの鶴さんのホームコース。練馬インターから関越自動車道に乗り、東松山インターを経て小一時間。森林に囲まれた美しい丘陵コースながら、ショットを曲げると、崖あり谷あり、林ありで難しい。優勝は前回 2 位の丸善の松浦さん。試合前の練習の成果を発揮、ショットが見事でした。2 位は三宅さん (丸善 OB)。手堅くまとめられ、ベスグロス賞も獲得されました。3 位には、竹村さん (丸善 OB) が入賞されました。大洋交易の豊泉さん、豪快で素晴らしいドライバースhotでドラコン 2 本を獲得されました。80 回と最多出場を誇るゲート書房の村山さん、パットが好調で、前半ハーフの 11 パットには脱帽、羨望。表彰式に続き、賑やかなパーティ。4 位の日貿の中林さん、「久しぶりですので、今回は控目、次回は丸善の牙城を崩す」との力強いスピーチに思わず拍手がわきました。大洋交易の和田さん、「天気にも恵まれ、程々のスコアで良かつ

た」と幹事さんらしい 5 位入賞のコメント。楽しくゴルフが出来たと文化厚生委員長のトッパン関野さん、そしてゲート書房の村山さんと楽しいスピーチが続き、釣瓶落の夕陽が西の空に沈む頃には、和気あいあい賑やかなパーティもお開きとなりました。

成績表		G	HC	NET
優勝	松浦拓巳 (丸善)	94	18	76
2 位	三宅昭三 (丸善 OB)	88	6	82
3 位	竹村政彦 (丸善 OB)	95	12	83
4 位	中林三十三 (日貿)	93	9	84
5 位	和田茂 (大洋交易)	102	18	84
ベストグロス 三宅昭三 (丸善 OB)		G88		
ドラコン 豊泉弘 (大洋交易) 長山卓郎 (丸善)		西山久吉 (西山洋書)		

ニアピン 関野元 (トッパン) 中林三十三 (日貿)

(HN 記)

フォティラブ (JBIA テニス同好会) 報告

96 年の暮もおし迫る 12 月 7 日、フォティラブのテニス合宿と忘年会を津久井湖畔のプチピラで約 20 名の参加を得て盛大に行った。寒さもそれ程でなく、割合と暖かい日和のもと、勝った、負けたと、ドローが続けられた。一部、負け組が何度も同じ強敵に挑む姿があったが、翌日の足腰は大丈夫だったのだろうか？しかし、日没も早いので時刻 4 時にはテニスを切りあげ 5 時からの忘年会となった。西沢会長より、96 年の参加者も 5 回開催でのべ 120 名にのぼり、盛大で親密に、それぞれの合宿が成功裏に終了したことのお礼と、今年は数名のなつかしい顔が復帰されたことも有意義だったとのあいさつの後、和やかな雑談に入っていた。

96 年の 5 回の合宿も、箱根、津久井湖、野田などとあちこちで開催し、一度は大阪勤務の方も参加された。また、一度は川越方面での開催も検討されたが実現には至らなかったの、数年のうちには実現させるよう努力していきたい。

いろいろあった JBIA の 96 年だが、テニスというスポーツを通じて育まれた友情が実をつけはじめたという感も、数年ブランクがあった人びとの参加を得ただけに、ひとしおである。実際、テニスは老若男女、それなりに楽しめる手軽なスポーツ。日頃、運動不足を嘆いておられる諸兄・諸姉も、97 年より是非、ご参加あれ。

97 年もまた、強気の統率力で合宿を重ねていきたいと思っている。初心者の方々でも懇切丁寧な先輩が、手とり足とり教えてくれるので安心してご参加を！また、足の便、宿泊の簡便なコートがあるところがあれば幹事までご一報頂きたい。

なお、97 年の第一回目の合宿は 4 月 11 日 (土) に津久井湖畔プチピラにて開催の予定。毎年の報告でご存じの通り、見事な花見ができる時期を選んでいる。花吹雪のもとでのテニスも中々乙ですよ。

(東光堂書店 柴田：記)

寝正月 テレビで歌とのおつきあい

島 岡 丘

「肺炎になるわよ、寝てなさい！」という台所からの声！ 39度以上の熱が下がらないので止むを得ない。Staying in bed というよりは Confined to bed のいやな感じ！ 直るのに1週間はかかるという医者のお達し。テレビを見ながらの憂鬱な寝正月か。

夢うつつになっているとき、様々なことを思い出す。アメリカ到着の最初の2、3日は、夜になると目がパッチリ開いてなかなか寝付けない経験を思い出した。多少負け惜しみではあるが、これは必ずしも不都合とは限らない。私にとってそのような時間はふだんよりも一段と想像力が鋭くなる大事なひとときである。シアトルに現地録音、取材場所の設定に出かけたときもその前夜の空想が役立ったし、ロス在住の女流作家のところへ TESL 教材の協同執筆のために出かけたときも翌朝までにストーリーの登場人物像がより鮮明になっていたことを思い出す。

今年のお正月テレビ番組で私にとってのハイライトはNHKの「新春夢サウンド」であった。「明日に架ける橋」、「素顔のままで」、「慕情」などを聞くことができた。全国から集まった5000枚ほどの葉書から着物姿のよく似合う石田あゆみさんと外人タレントの司会のもと、リクエストの多い曲を選んで一流の歌手が歌ってくれる。1時間半の番組だったがすっかりとりこになった。学校の教科の英語が嫌いという学生や生徒がいても音楽が嫌いというものはほとんどいない。こんなことを考えながらテレビを見てみると、英語の音声面を指導するときの手がかりが実に多いことにあらためて気がついた。そして、これらを教育資源として集めておいたら、教室の場面で実に自然にまた能率的に英語の発音を身につけさせることが出来るのではと思った。以下いくつかの例をあげよう。

日本語の「愛」と英語の I [aɪ] は力のいれ方が異なり、日本語ではアとイがほとんど同じ強さと長さで発音されるが、英語では出だしの [a] のほうが後の [ɪ] よりもずっと強く長くなる。やや精密な表記で表すなら [aːɪ] となる。英語音声学のゼミであればこのような説明がなされても差し支えなからうが、英語教育の入門期では学習者に嫌気を起こさせてしまう。そこであの有名

なレイ・チャールズ自身が歌った「ジョージア」のなかに出てくる "...on my mind" の my と mind のように「ァンムアー ムアーインド」の感じで言えば、I とか my だけでなく、Hi. Bye. Good night. などもっと英語らしく響く。Martin Luther King の有名なスピーチの一節、「I have a dream.」から boys and girls の boy は「坊主」のように発音されているが上例で、学習者によりよく英語の二重母音性を定着させることができる。

[ɪ] と [t] の音のよいモデルは "Let it be" が一番良いのではないだろうか。[ɪ] の特徴は日本語にはないが、舌先に自分の力を十分加え、舌先で歯茎を押し上げ、声を舌の両側から出しそれから舌先の支えを取り外すのである。日本語を話している限り、舌先に歯茎を突き上げる力は培われない。強いて日本語を使うのであれば、「ン・ダ」から「ン・ラ」に声を出し方を舌の側面に切り替えるしかない（前々回の「近似カナ表記」参照）。

[t] が語頭または音節頭の例には "Love me tender" の t が代表的なもののだろうが、let のように音節末に表れ、その後には it のように後続音が母音の時はアメリカ英語ではラ行音に近くなると覚えていると気楽に発音することが出来る。let it は「ン・レツリッピーー」がカナによる最も接近した表記と言うべきか。

Let it be の [b] の前の [t] を発音するのは誰が言おうとしても言えないのが普通である。司会の石田あゆみさんは何とかして [t] を出そうとして努力されている様子だったが、t+b は破裂音の連続で、日本語なら母音を挿入して解決するが、英語では t の開放性が抑圧され未開放の t (unreleased stop) になる（文献例：P. ローチ著『英語音声学音韻』（大修館発行）島岡・三浦訳）。「Flash Dance」の中にある What a feeling の部分はラ行音化した t また語中の l として良いモデルだし、「Shall we dance?」の Shall は音節末の l の良いモデルであろう。日本語のコマーシャルで「...ナル」とわれわれの耳に残っているのは英語の [ɪ] のイメージは形成されにくい。「...ヌウ」というほうがより英語に近くなる。

日本語は子音の次が母音が来るので音節内部構造は簡

単である。しかし英語では子音の次に l あるいは r が来
てから母音のことが多く、日本語話者は途中で母音をい
れてしまう。これをなくすためには My dream's come
true を「マイ デュイームズ カム チュー」のように各々
1 音節で歌うようにするとよい。

この番組を聞いていて、ことばの練習も歌の練習もリ
ズムを大切にするという共通の点があると思った。番組
の中で一流の歌手が、リズムには人を立ち止まらせず、
どんどん前進させていく原動力のようなものがあるとい
う趣旨を発言したが、英語の学習においてもことばのリ
ズムを中心に据えた学習法をもっと取り上げてよいの
ではないか。とかくそのような動きはこれまでにあった
が、途中で息切れてしまうのは個人の研究レベルで留
まるからだろうか。あるいは音節内の構造がよくわかり、
子音同士の衝突による自然な同化現象がよく研究されて
いなかったせいではないかと思う。

正月のこの歌番組で、日本の一流の歌手は英語の歌を
本当に英語らしく歌い、言語体系が異なっても外国語ら
しさを十分身につけることが出来ることを示し元気と自
信を与えてくれた。リズムの力を生かして英語の学習を
することは筆者の課題でもある。

複雑なリズムは別として、まず基本的なリズムから考
えよう。

- — (強弱強 型): 歌詞: Let it be.
Love me true.
- — — (強弱強弱型): 歌詞: Love me tender.
- — (弱弱強 型): 歌詞: Shall we dance?
- — — (弱弱強弱型): 歌詞: What a feeling.

リズム型について最も詳しく述べたのは W. Stan-
nard Allen, *Living English Speech* (Longman,
1954, 1965) であるが、現在絶版である。Allen のリズ
ムについての考え方は次の文に示されている。

“The stressed syllables should in all cases be
fairly regularly spaced out and the unstressed
syllables be made to accommodate themselves
to the steadier movement of the stress.”

(強勢を持っている音節はどの文の場合でもかなり規
則的な間隔で表れることになるので、強勢のない音節は
その比較的安定している強勢の動きに合わせるようにす
るのがよい。(同書、31頁))

日本にかなり多くの ALT (英語授業補助者) がいる

のにかからず、リズムを教えるのは、状況によって
リズム型が異なること、あるいは英語母語話者の体の一
部となっており、客観視出来にくい事情などがある。筆
者は英語の中学検定教科書 *Sunshine English Course*
の執筆の関係で、録音スタジオで立ち会いを多く重ねた
が、一つの文を言うときでも、どの部分を背景 (back-
ground) とするかあるいは前景 (figure) とするかによ
って強勢が変わるし、また、既知情報と新情報との解釈
のずれによっても具体的な強勢の表れ方が異なる。例え
ば、I can't ski. という簡単な文でも、私はスキーすら
も出来ないという時は、ski が前景となり、みんなスキ
ーが出来るのに私だけがスキーが出来ない意図で言う
ときは I が前景となる。前者の強勢型は・・一となり、後
者の強勢型は一・・となる。

しかし、入門期の英語では、考えさせる英語教育をあ
まり押し進めることは得策ではなく、テキストを見れば
どこを強く声を出して言えばよいかが一目瞭然としたも
のがよい。言い換えれば英語母語話者が使うテキストよ
りも視覚情報を多くしておくのがよいと思う。

Penguin Books in Japan 出版物の中で例えば La-
dybird シリーズなどのものを発音クリニックなどで好
意的に活用させてもらったが、例えば、*Tom Thumb*
の出だしの文は次のように展開する。

There~was once~a woodsman and~his wife who~
were very \sad, because~they had no \children.
(太字は強く言うところ、~はつなぎ、\は下降調)

最近では CD-ROM の発達などによって音声、意味、
近似カナ表記などを学習者の必要に応じ自由自在に画面
に呼び込むことが出来るようになった。学習者はマウス
をクリックするだけで、目の前に様々な画面を展開させ
ることが出来る。『リトルスター英絵辞典』(小学館)を
もとにした CD-ROM 教材の『こどもピクトグラフ』、
さらに、童話からの『おおかみと七匹の小やぎ』、『マッ
チ売りの少女』など、今後この種の教材が楽しみである。

すっかり寝正月になってしまい、年始、テキサスから
戻った長男とのスキー旅行、教え子たちとの新年宴会な
どすべてキャンセルしたが、寝正月は偶然にも、音楽と
ことばとの関係を考えさせてくれた。それと同時に健康
の価値と尊さ、体力のつく食事や病院との連絡などを献
身的にやってくれた家内への感謝の気持ちが残った。一
段と寒くなる折、どうぞお体を大切に。

(筑波大学名誉教授/現茨城キリスト教大学教授)

病原性大腸菌 O-157：雑感（続）

医学書院 MYW 荒 木 亮 一

昨年の10月号に投稿した「病原性大腸菌 O-157：雑感」を読んで、「もっと早く書くべきだったんじゃない、タイミングが遅かったと思うよ」という感想が届いた。O-157は法定伝染病に指定された。通常“Epidemic”とは、病気でファッションでも、突然にやってきて猛威をふるい、後遺症を残して風のように過ぎ去ってゆくものである。しかし、O-157の場合は、最近の「細菌情報」を読むにつけ聞くにつけ、本当に「終わった」のだろうか、と言う疑問が残る。“The danger past and God forgotten”の The danger は、アメリカ等の例を見ても、まだ過ぎ去るには時間が掛かりそうだ。その後の新聞等に目を通してみると：

つい2ヶ月程前の11月17日の新聞が、米食品医薬品局(FDA)の発表として「抗生物質耐性の O-157」が見つかったと報じている。「細菌には抗生物質が効く」筈であった。その考えが臨床の医師を「細菌」より「免疫」や「ウイルス」の研究に向かわせ、「細菌」の研究が疎かになっていたために今回のような対応の遅れをもたらした、と言うから恐ろしいことである。普通の「菌」には効いたにしても、具体的な指針がないままの抗生物質投与が O-157の「菌」をより強力なものにしてしまったのかもしれない。しかも「O-157」をやたらに殺すと、その過程で大量のベロ毒素を出させることになり、感染者の身体に多大の影響や後遺症をもたらすことになるそう。食中毒の場合は「菌」の特定ができるまで点滴で体力維持を計る。「O-157」を見聞きしていると確かに「菌は進化」していて、環境への順応も早いのかも知れないと思う。

また、その記事から2週間もしない11月29日には、英国のスコットランドのグラスゴー南東に位置するラナークシャー地区というところの住民が食中毒の被害を受けたとの記事があった。130人以上の感染者の殆どが高齢者、病原性大腸菌 O-157による死亡と確認された人を含め老人5人が死亡、40人が入院して治療を受けたそう。アメリカでも1982年に O-157が確認されて以来、毎年被害が出ていると言う話を聞いたが事実のようである。日本では、1990年の浦和市の集団感染の際、感染症を経験した市や県が報告書を纏めたのも、予防対策研究をぜひ

行って欲しいと言う希望と熱意からであったに違いない。だが、国立予防衛生研究所をはじめ、国の研究機関は対応せず、厚生省もそ知らぬ顔であったとか。「浦和の教訓生きず」、「あいつがやってくる」、「O-157列島感染」等、新聞の見出しは多くの人達の記憶に新しいと思う。注意深く観察を続け、医療体制の充実を計り、我々庶民のために医療現場が初期診断の立ち遅れを二度と繰り返さないよう、真剣な取り組みを心から要望したい。

人間の目には全く見えない1,000分の1ミリと言う「O-157の菌」は、体が2層の膜に包まれているとかで、土や水の中でも数ヶ月生き続けるのだそうだ。殺菌力のある唾液や胃酸にも耐えて、果ては腸に入り込む。人間の腸の温度は「菌」の増殖に最適で、増殖に必要とする窒素や炭素がいっぱいある。せんもうで腸の内面にとりついてからの増殖のスピードは20分に一回だと言う大変な「菌」である。2次感染の防衛も大変である。改めてこれらの記事に目を通すと、前回「かわれ業者」の反論を支持したときの自信が揺らいでくる。

日本では、伝染病や食中毒に対し無防備過ぎるのか、何か恐ろしいことが起こりつつあるのだろうか。最近、知り合いのアメリカ人が「日本では寿司や刺身を安心して食べられる」と言ってくれたのも皮肉に聞こえたのが侘しい。日本は衛生面のレベルでも先進国でいたいとつくづく思う今日この頃である。

英国スコットランドのケースは高齢者が被害者であった。97才の父と、90才になり寝たきりになってしまった母のこと、まだ元気そうだが90才近い義母のことを思う。母が昔よく口にしていた「見ぬもの清し」が「今は昔」と悩ましい限りである。

「プレジデント」の1月号に医療ジャーナリストによる「O-157」に続く凶暴な細菌、ウィルスが出現する可能性。「細菌は再び逆襲する!」、細菌は再び日本人を襲う。”という記事があった。通常の食中毒菌が100万個のレベルで感染するのに対し、O-157は100個で感染すると言う違いだそう。グロウバルに感染症についての知識を蓄え、人間の免疫力を強め、細菌やウィルスに負けない努力を怠らないこと、と結んでいる。

USACO®

ユサコホームページ開設
Gateway to Virtual Library



<http://www.usaco.co.jp>

ユサコ株式会社

本社：〒105 東京都港区新橋1丁目13番地12号(堤ビル)
Tel (03) 3502-6472 Fax (03) 3593-2709

〔営業所〕

東京営業所：Tel (03) 3502-6472 Fax (03) 3593-2709
大阪営業所：Tel (06) 344-6624 Fax (06) 341-5291
名古屋営業所：Tel (052) 931-2601 Fax (052) 931-9833
筑波営業所：Tel (0298) 23-1773 Fax (0298) 24-7087

1997年1月 通巻第356号 洋書輸入協会
〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

編集者 神田 俊二

☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所＝藤本総合印刷株式会社